

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520481

研究課題名(和文)英学会話書の系統に関する研究

研究課題名(英文)Historical research on English-Japanese conversation books.

研究代表者

常盤 智子(TOKIWA, TOMOKO)

白百合女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60361557

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は幕末から明治20年までの日英会話書に関する研究である。これらは日本語史研究上、有用なものであるとされているが、資料群の全体像は十分に明らかではなかった。そこで、本研究は、(1)どのような質の資料が、どのくらいの量存在するのか(2)どの資料が日本語史に与えた影響が大きいのか(3)一つの資料群が成立、発展、解消される経過はどのようなものか。ということに着目し、調査を行った。5年間の研究期間において、580冊の書目を抽出し、それらを外部図書館、資料館への訪問、インターネットによるデータ収集などを通して、閲覧した。その結果今回の目的にふさわしい168書目を選出し、それらの位置づけを試みた。

研究成果の概要(英文)：This research is a study on the Japanese-English conversation textbooks in the latter half of 19 century (from late Edo period to Meiji 20). Although these books were known as useful materials which restructure the of Japanese language history, the data of the whole was not clear enough. Therefore this research intended the following and investigated it. (1) What kind of data and how much data exist? (2) Which data has great influence in Japanese language history? (3) How is the process of the appearance of the Japanese-English conversation books, the development, and the disappearance? By the research for five years, 580 books were chosen and investigated at the domestic and overseas libraries, and the data collections in the web. As a result, 168 books suitable for the purpose of this research were chosen, and they have been arranged in Japanese language history.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：日本語史

1. 研究開始当初の背景

幕末・明治初期に、新たに生じた西欧諸国との交流の成果として「洋学資料」と呼ばれる資料群がある。このうち特に、語学学習書の類には、当時の日本語が直接反映されていると考えることができ、当時の日本語を研究するにあたり、大変重要な資料となることが知られている。

洋学資料研究の意義は、主に、その対訳日本語学習資料に収録されている日本語の研究を通して、それが当時の日本語をどのような形で反映しているかを明らかにし、そこから幕末以降の日本語がどのようにして現代の日本語へと変貌していったのかを解明する手がかりを得ることにある。

この洋学資料のうち、英語母語話者による日本語学習の資料、または日本人による英語学習の資料を「英学資料」とよび、この英学資料は幕末から明治にかけての日本語研究における中核的な資料群となっている。

今回とりあげた英学資料に関しては、すでに先行研究によって、ある程度、書目整備が行われている(たとえば、荒木伊兵衛〔1931〕『日本英語学書志』創元社、大阪女子大学附属図書館編〔1962〕『大阪女子大学蔵日本英学資料解題』(1963補遺)大阪女子大学、惣郷正明〔1970〕『図説日本の洋学』築地書館)。ところが、該当資料の数が多い一方で、閲覧の難しさや、資料性のばらつきにより、研究の進んでいる資料はごく一部に限られているという状況である。また、各解題も、個人や図書館のコレクションを中心としたもので、それらを資料群全体として横断的には扱ったものはほとんどみられないという現状である。

もちろん、個々の資料については、着実な研究や翻刻が行われている(例えば松村明〔1970〕『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版、加藤知己・倉島節尚〔1998〕『会話日本語 - 複製と翻訳 - 研究 - 』三省堂、堀孝彦・遠藤智夫著〔1999〕『英和对訳袖珍辞書』の遍歴 - 目で見る現存初版15本 - 』辞游社ほか)。しかし、やはり、資料の数に比してその研究はまだ途上であると言わざるを得ない。加えて、個々の成果は発表されているものの、複数の資料間の関連性について検証される研究も、多いとはいえなかった。

一方で、このような状況のもと、申請者は、最近の研究活動により、いくつかの資料間の関連に言及する機会を得た(例えば〔2004〕「J・リギンズ『英和日用句集』の成立過程『南山俗語考』との関連を中心に - 」、〔2007〕「J・リギンズ著『英和日用句集』から『英和通弁手引草』へ」)。これらの取り組みを通して、日本語と英語の対訳会話書が、日本語と中国語の対訳会話書と関係していたということや、今まであまり重視されることのなかった日本人の英語学習書が、英語母語話者の日本語学習書とも深く関連をもつ

ていたことを明らかにしてきた。申請者はこれらの研究活動を通して、資料群の整理にあたって、資料間の関係を重視する視点での検証が不可欠であると考えに至った。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、対象を幕末期から明治初期の英学会話書とし、先行研究をふまえた上で、横断的な書目の整備を行った後、それらをいくつかの系統に位置づけ、本研究課題を通して、いままで特定資料の利用に限られた英学資料が日本語史研究にさらに大きく貢献し、さらには、英学史、日本語教育史、日本史等の隣接分野においても活用される契機となることを研究の目的とした。

具体的には、本研究により、英学会話書における未整備、未開拓の資料に対して資料整備を行い、(1)どのような資料がどの程度現存しているのか、(2)その中で日本語史に貢献する資料研究がどのような資料であるのか、(3)資料の系統関係はどのようなものなのか、について注目した。

質・量ともに多岐にわたる資料群を、いくつかの有力な資料との関係で説明すること、また、その継承関係などを明らかにすることから、今後の資料研究への見通しを得ることを目指した。

3. 研究の方法

研究目的にも記したとおり、資料目録の整備、資料の閲覧・収集、個々の資料に基づいた検討がその中心的な活動となった。

本研究は、単独で行う、研究期間の長い研究課題とした。先に述べたように、対象とする資料数を考慮に入れると、通常、一人で取り組める規模のものではない。しかし、分担研究者との共同作業を行った場合、個々の資料への目配りが均質でなくなるおそれもある。そこで、この矛盾を解決するために、研究期間を5年と長く設定し、研究対象も、英学資料のうち、英学会話書という分野に限定するという方法を試みた。また、対象を英学会話書に限ったのは、綴り字書、辞書や文法書等を含めた場合、資料が膨大で、一人で行う研究としては不向きであることもその理由であった。

また、本研究では、口頭言語の採取という意味で最も興味ある資料となる英学会話書の研究を行うことで、周辺資料を含めた資料群全体への見通しを得られるよう考慮した。

研究期間中、第1年目は、目録の整備を中心に、第2年目から4年目については、資料閲覧、資料収集を行い、第5年目に全体のまとめを行った。

具体的な作業としては、まず、幕末から明治初期の書誌調査を網羅的に行うために、複数の版權目録と出版目録等を利用し、目録の

整備を行った。

基礎データ参照資料は主に以下のようなものを利用した。

- ・大学編『新刻書目一覧』明治3年刊(明治2年5月~明治12月分)
- ・行政官大史局編『新刻書目一覧』明治4年刊(明治3年2月~明治4年4月分)
- ・文部省編『准刻書目』明治4年10月~明治7年11月(4年11月欠)
- ・内務省『版權書目』(明治8年10月~明治16年6月分)
- ・内務省「版權書目広告」(明治16年7月~明治20年12月分)
- ・内務省『出版書目月報』(明治11年1月~明治20年6月分)
- ・内務省『図書課書目』明治19年出版
- ・東京書籍出版社営業組合『書籍総目録』明治26年出版
- (以上、『明治前期書目集成』『明治前期書目集成 補巻』所収)

- ・太田勘右衛門編〔1874〕『戊辰以来 新刻書目便覧』明治7年出版
- ・村上勘兵衛編〔1874〕『御維新以来 京都新刻書目便覧』明治7年出版
- ・松田正助編〔1874〕『戊辰以来新刻書目一覧』明治7年出版

この作業と、併行して、該当資料の閲覧・収集を行い、個々の資料の関係やその分布などを知るために現存の確認と、内容についての検討を行った。

また、本研究では、先行研究の指摘にとらわれず、本文の内容を検討することにより、各資料の位置づけを行うことができるよう留意した。そのために、基礎資料の本文データを作成し、本文比較に用いるという方法も試みた。個々の資料を有力資料との関係という視点で整理することは、資料群全体の研究へと還元されていくべきものと考えたからである。

資料収集には、国内のみならず、海外の図書館も利用した。資料整備には、国立国会図書館近代デジタルライブラリーを中心に、インターネットで公開されているデータベース類もその対象とした。計5年間での関連資料閲覧として以下の図書館・資料館を訪問した。

貴重書閲覧訪問機関(科研費予算より出張)

- 2010年8月 京都大学附属図書館
 - 2010年8月 同志社大学今出川図書館
 - 2011年3月 静岡県立図書館英文庫
 - 2011年9月 香川大学附属図書館、神原文庫
 - 2012年2月 イギリス大英図書館
 - 2013年3月 鹿児島大学附属図書館、玉里文庫
- (そのほか)

国立国会図書館
東京大学国語研究室
東京大学附属図書館
東京大学文学部図書館
東京大学駒場図書館
横浜開港資料館
東洋文庫
韓国国立中央図書館

4. 研究成果

最終的には、580書目のリストを作成し、個々の検討を通して、168書目の選定を行い、以下のような見通しを得た。

(1) 資料の成立時期からの検討

資料の成立時期の分布を検討すると、明治5年ごろと明治18年以降に資料の増加がみられ、偏りがみられた。この状況は、国内の出版事情など、さまざまなことがらと関連があると考えられる。

(2) 資料のデータ量からの検討

資料を時系列で並べて検討してみると、初期に比べ、徐々に一冊の情報量が増えてくる様子が見えてきた。必要最小限の表現からより複雑な内容を扱うようになるということ、底本をもとにした、引き写し、複数の底本の複合や編集、などがおこなわれることによって、その分量にも変化が生じたものと考えられる。基本的なフレーズから、多様な場面、オリジナルなものから、資料の参照、複数の資料の編集などへと、資料の様式が変化していった可能性が窺えた。

(3) 資料の系統から

江戸時代の蘭学を引き継いで、初期には蘭英の会話書を典拠とするものが優勢であり、その後、英仏の会話書を典拠とするものへと変化していくことがみとれた。また、英語の教科書や、それ以外の国の会話書を参照したと思われるものも存在している。

今回、調査を行った底本の中では、前半期には、オランダ系の会話書が参照され、その後、BartelsとBellengerなどの英仏系の会話書が参照されている様子が見られた。特に、後半期のBartelsは、Bellengerよりも多くの資料の題材とされたようである。

また、現在調査中ではあるが、Bartelsという名前がでてきても、内容に共通点が見られない資料もあるようで、今後調査していく必要があると考えている。もし、名前のみを引き継いだ資料があるとすれば、例えば、Bartelsが一種の会話書のブランド名になっていったという可能性も考えられる。資料名や、著作者が日本人か外国人かということなども、英学会話書の内容や、系統の変化に反映されていることが窺えた。

また、Chouquetの会話書には、松本孝輔『英和通信』の影響が強くみられるようであった。後半期には、先にも述べたように、全体や

部分をそのまま引用するという形式から、抜粋しながら、他の資料などからの補充などもおこないつつ、著作が編集されている様子もつかえ、単純に、影響のあるなしを、区分することが難しくなるというのも一つの特徴であった。

(4) そのほか

今後、さらに調査を進めていくことで、英学会話書という資料群が、成立し、外国語の会話集を利用しながら、多様化し、変化していく様子を追うことができると考える。

このような問題点を考えるに当たり、本文データベースを作成し、比較するという方法もある程度有効であるとの見通しを得ることもできた。

(5) 今後の課題

今回行ったような、比較作業は、今後の同系統での本文比較に有効になるものと思われる。同じ内容をもつ異なる日本語訳に対して、考察していくことで、当時の日本語の実態を知る手がかりになることが期待される。資料内の質の違いが単なる劣化ではなく、資料作成の目的による変化という方向でとらえることができれば、現在、重視されていない資料も、今後、分析に耐えうる資料として利用される可能性が生まれる。

さらに、このような結果を、ある特定の資料群をとらえる、一つの類型と考えれば、他の日本語史の資料群との共通点・差異点を比較することも、興味深い課題となるだろう。

今回の作業においては、資料名のみが、記録にあり、現存が確認できなかった資料や、存在していても未見の資料が、なお多く存在しており、現段階で資料群全体を網羅するには及ばなかった点について、今後の課題としていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

常盤 智子

「J.F.ラウダー著『日英会話書』の日本語 - 人称代名詞から - 」

『近代語研究』、査読無、第15集、武蔵野書院、pp.488-500

常盤智子

「J.F.ラウダー著『日英会話書』語彙集について」

『近代語研究』、査読無、第16集、pp.1-15、武蔵野書院

常盤智子

「富田源太郎著『英和婦人用会話』にみられる助動詞「ウ」+終助詞「ワ」について」

『近代語研究』 第17集、査読無、武蔵野書院、pp.170-186

〔図書〕(計1件)

常盤智子

『英学会話書の系統に関する研究』松田印刷、pp.1-53

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常盤 智子 (TOKIWA, Tomoko)

白百合女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60361557

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)